

聖書：創世記 8：1～22

説教題：その芳ばしい香りを

日時：2023年4月30日（朝拝）

6章から始まったノアの洪水物語は8章に入るとガラッと雰囲気が変わります。地に襲いかかった大洪水の水が引き始めるからです。7章後半と8章前半を読み比べると見事に対称的な表現となっています。たとえば7章11節に「大いなる淵の源がごとごとく裂け、天の水門が開かれた」とありましたが、8章2節では「大水の源と天の水門が閉ざされ」と記されます。7章18節に「水がみなぎり、地の上に大いに増し」とありましたが、8章3節に「水は、しだいに地の上から引いていった」とあります。7章24節に「水は百五十日間、地の上に増し続けた」と記されましたが、8章3節に「水は百五十日の終わりに減り始めた」と記されます。7章17節で箱舟は「地から浮き上がり」ましたが、8章4節で箱舟は「とどまった」と記されます。もう一つ7章19節に「天の下にある高い山々もすべておおわれた」と書かれていましたが、8章5節にその「山々の頂が現れた」とあります。この変化をもたらしたものは何だったのでしょうか。それはその中心の8章1節、神がノアと箱舟の中にいたすべての獣およびすべての家畜を覚えておられたということでした。この8章1節を境にして大洪水の水は引き始めます。これは神が突然ここでノアたちのことを思い出した、それまでは忘れていたという意味ではありません。「覚えておられた」と訳されていますように、神はすでに8章1節よりも前の時点から覚えておられました。その覚えておられた主によって、大洪水の水はついに引き始めたということを創世記は書き記しているわけです。

私たちはここで8章1節以前から神がノアたちを覚えておられたことを思い巡らしたいと思います。ノアたちは7章後半で恐ろしい状態に置かれました。地を飲み尽くす激しい水が上から下から襲いかかり、まるで天地創造以前の混沌とした状態に逆戻りするかのような恐ろしい世界の中に彼らはありました。太陽の光は見え、激しい波と嵐に翻弄され続ける日々でした。また沢山の動物と一緒に、その鳴き声あるいは排泄物に囲まれる生活でもありました。そして箱舟の外では人間も含めてあらゆるいのちが洪水によって消し去られています。この世界で生きているのは箱舟の中にいる者たちだけです。世から隔絶された言いようのない淋しさ、孤独感の中にもあったことでしょうか。またノアたちは最初、数日間で終わると思ったかもしれませんが、しかし

40日40夜大雨は振り続け、何と150日間、つまり5カ月以上も水はみなぎり、地上に勢いを増し続ける状態でした。果たしてどこまでこの状態が続くのか、終わりの見えないような試練の中に置かれていたでしょう。

しかし8章1節に「神は覚えておられた」と記されています。ノアだけでなく、ノアとともに箱舟にいたすべての獣とすべての家畜もです。その神がおられ、ご自身の約束に忠実であられるがゆえに、時満ちて事態が動き出したのです。すべてを司っている主の御手によって、大洪水のさばきはついに頂点を越えて水が引き始めたのです。1節の「神は地の上に風を吹き渡らせた」という言葉は、創世記1章2節の「神の霊がその水の面を動いていた」という言葉を思い起こさせます。ご存知の通り、聖霊を指す「霊」という言葉と8章1節の「風」という言葉はヘブル語ではどちらも同じ言葉です。ですからあの天地創造に関わった聖霊が、洪水後の世界におけるいわば再創造の働きにも再び関わっていたということを暗示します。そうして水の源は閉ざされ、水は次第に地から引き始めました。水の面を漂っていた箱舟はアララテの山地にとどまりました。そしてしばらく時間が経過してついに山々の頂きが現れるようになりました。

そんな中、ノアは箱舟の外の様子を知るために鳥を放ちます。最初に放ったのは鳥でした。鳥は鳩に比べると、より強い鳥のようです。厳しい環境の中でも生き残ることができます。水面を漂う死肉、腐肉を食べて生きることができます。より長く飛ぶ力を持っています。鳥は出たり戻ったりしたと7節にあります。まだ外は住み続けられる状態ではありませんでした。

おそらくこの一週間後のことでしょう。ノアは今度は鳩を放ちます。鳩はより大人しい鳥で鳥よりは弱い鳥です。この鳩もこの時は足を休める場所を見つけることができず、箱舟に帰って来ます。ノアは手を伸ばして鳩を捕らえ、箱舟の中に迎え入れました。これは愛情を持って被造物を管理するようと命じられた人間のあるべき姿であり、神御自身を映し出す姿であると言われます。

それから七日待つてノアは再び鳩を放ちます。そして今度は良いしるしを受け取ります。鳩は夕方になって彼のもとに帰って来ました。「すると見よ、取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか」とあります。夕方になって帰って来

たということは随分遠くまで行ったということなのではないでしょうか。その場所では新しい命が芽吹いているということです。ノアは水が地の上から引いたのを知りました。

そしてその一週間後、鳩はもう彼のところに戻って来ませんでした。世界はすでに鳥たちが十分生活できる状態になっていることをそれは示してくれました。

そしてついに年が明けてノアの 601 年の第一の月の一日に、水は地の上から干上がりました。ノアが箱舟の覆いを取り払って眺めると、見よ、地の面は乾いていました。彼はそのことをはっきり見ました。神はここまで導いてくださいました。

しかしこの記事の驚きは、ノアはこれを見てもなお舟から降りなかったということではないでしょうか。彼が箱舟から降りたのはいつだったでしょう。14 節から、それは第二の月の 27 日であったことが分かります。1 月 1 日に箱舟の覆いを取り去って、地の面が乾いているのを見てから何と約 2 か月も後です！すでにノアは長い間、箱舟の中にいました。7 章 11 節に、箱舟に乗ったのはノアの 600 歳の第二の月の 17 日であったとあります。それからすでに一年以上経過しています。新年の 1 月 1 日、もう地の面は乾いています。ここまで守られたことを感謝し、新年を記念して外に出てみようとは思わなかったのでしょうか。しかしノアはなお箱舟にとどまりました。なぜでしょう。それはこの日まで箱舟から出るようにとの神の命令がなかったからです。主はこの日にノアに告げました。16～17 節：「あなたは、妻と、息子たちと、息子たちの妻たちとともに箱舟から出なさい。すべての肉なるもののうち、あなたとともにいる生き物すべて、鳥、家畜、地の上を這うすべてのものが、あなたとともに出るようにしなさい。それらが地に群がり、地の上で生子、そして増えるようにしなさい。」注目すべきは 18 節の最初に「そこでノアは」と書かれていることです。神の言葉をひたすら待ち、それに従って行動する彼のあり方が、この言葉に端的に示されています。16～17 節の主の言葉と、その後の 18～19 節のノアの行動はほぼ同じです。ある意味で無駄にことばを繰り返しているだけのようにも感じられますが、これはノアがいかに主の言葉にその通り従って歩む人であったかをより強調するものともなっているでしょう。彼の行動基準は自分の考え、自分の願い、自分の判断ではありませんでした。彼の行動基準は主の言葉でした。まさに主と共に歩んだと言われるノアの姿がここにも雄弁に証しされています。

そして箱舟を出たノアがまずしたことは何だったでしょう。それは主なる神への礼拝でした。これから新しい世界で生活して行くためには必要なことが色々あります。まず住居の問題があるでしょう。衣服の問題もあります。食料の問題もあります。しかしまずそれらの確保へと向かったのではなく、ノアは神への礼拝を第一にしました。ここに救われた民の第一の特徴は主への礼拝であるべきであることが示唆されています。神は悪で満ちているこの世界を洪水で滅ぼし、本来あるべき世界を取り戻そうとされました。そうして救われた者たちはさばきを免れた！と言って喜んで箱舟を出て、まずは自分の必要を満たすことや自分の好きなことに優先的に向かって行くようでは意味がありません。神が洪水のさばきを経て取り戻そうとされたのは、ノアのように進んで神礼拝を第一とする民であるということです。神の目的はただ人をさばきから救うことではなく、礼拝する民の回復であったことがここに示されています。

その礼拝に対する神の応答が最後の 21～22 節にあります。21 節に「主は、その芳ばしい香りをかがれた」とあります。これはノアとノアのささげものを主が受け入れたこと、それを喜ばれたことを表しています。そしてその芳ばしい香りをかがれたがゆえに、この世界を今回と同じように滅ぼすことはしないという約束が与えられます。神は人の心が思い図ることはいつも悪であるのをご覧になり、地が暴虐で満ちているのをご覧になって洪水のさばきを行われました。このことは悪に対しては必ずこのようなさばきがあるということを示すものです。しかし人間の悪を見るたびに今回のようなさばきを行っていたら、この世界には救いがないこととなります。主はノアの礼拝を受け、そのささげものの芳ばしい香りをかがれて、同じようなさばきを再び行うことはしないと心の中でお決めになりました。反対から言えば、世界の最後の日までこの世界を保持してくださるということです。22 節に「この地が続くかぎり」とある通り、最後のさばきの日は考えられています。しかしそれまではこの世界が規則的に続くようにされる。「種蒔きと刈り入れ」とは、食べて物を継続的に与えて人類の歩みが続くことを保証するということです。また「寒さと暑さ、夏と冬、昼と夜がやむことはない」というのも、自然のリズムを神が保たれるということです。神はこのような摂理の御手をもって地を祝福くださるのです。そしてその間に人間が救いにあずかることができるよう憐み深く臨んでくださり、そのチャンスを、機会を提供してくださるのです。この神の約束はさらに 9 章の内容につながって行きます。

私たちは今日の 8 章から何を学んで自らに適用すべきでしょうか。まず心に留めた

い一つ目のことは神が今日もご自身に信頼する私たちを覚えておられるということです。大洪水のただ中でも主はノアと、ノアとともにいるものたちを覚えておられました。私たちも自らにこのことを当てはめたいと思います。様々なことが毎日の生活にあっても、そのただ中で神が私たちのことを覚えておられます。そしてご自身の最善の時に救いのみわざを明らかにしてくださいませ。その主を見上げ、主に感謝して、ノアのように主に従う生活へ進みたいと思います。

二つ目に私たちは礼拝の民へと召されています。神の救いの目的は礼拝の民を取り戻すことです。救いを受けた民の第一のしるしは礼拝であるということです。この礼拝が私たちの生活の特徴になっているでしょうか。ノアがまず礼拝へと向かったように、私たちも礼拝を第一とする者へ、ここに本来のあるべき状態へと回復された者たちとしての姿を表して行く者へと導かれたいと思います。

そしてもう一つ覚えたいことは、御心にかなう礼拝をささげる時、神は私たちのその礼拝を心から喜んでくださるということです。それは芳ばしい香りとなって神の前に立ち上り、神が受け入れてくださる。そして豊かな祝福を与えてくださる。このノアのささげものとそれを受け入れる神のお姿は、やがてのイエス様による献げ物と、それを受け入れる神のお姿を指し示すものでもあります。そしてここにある「芳ばしい香り」という表現は、エペソ人への手紙5章2節でまさにイエス様のささげものに当てはめて使われています。エペソ書5章2節：「また、愛のうちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけにえとし、芳ばしい香りを献げてくださいました。」確かにイエス様のささげもの、すなわちご自身をいけにえとして私たちの身代わりにささげてくださった愛の行為こそ、神の前に献げられた最も偉大で芳ばしい香りです。その芳ばしい香りによって、それをかがれた神の怒りはなだめられ、神は主イエスにより頼む者をさばかず、その罪を赦し、いのちの祝福へと受け入れてくださいました。そういう意味でこのノアのささげものはやがてのイエス様のささげものを先取りするものです。私たちはそのことをここに見てイエス様に感謝し、父なる神に感謝したいと思います。と同時にエペソ書5章2節の文脈もそうであるように、私たちもまた芳ばしい香りをささげるようにとされています。私たちが主に心からの感謝の礼拝をささげ、また言葉と行いをもって礼拝の生活をささげる時、主はそれを芳ばしい香りとしてかがれ、深い喜びをもって受け取ってくださいませ。そしてそのご自身の喜びをさらなる恵みを注ぐことによ

って表してくださいませ。そのことを心に留めたいと思ひます。私たちの礼拝は、このように主をお喜ばせすることができ、主が喜んで受け入れてくださることに励まされて、一層感謝の礼拝と生活を主にささげ、主が与えてくださる豊かな祝福に生かされる者たちへと導かれたいと思ひます。